

第36回 記者懇談会実施概要

1 日 時 平成17年7月6日(水) 15時～

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

3 内 容

(1) 研究発表(15:00～15:40)

・藤田 高夫 文学部教授

発表テーマ「東アジアにおける文化情報の発信と受容」 [資料1](#)

・大内 辰郎 工学部教授

発表テーマ「持続可能社会を先導する物質群の革新的開拓」 [資料2](#)

(2) 質疑応答(15:40～16:00)

(3) 学内状況説明・情報交換(16:00～16:30)

本学大学院生のJICAインターンシップ・プログラムへの参加について [資料3](#)

平成17年度文部科学省英語指導力開発ワークショップ事業への採択について [資料4](#)

2006年度学部入学試験実施概要について [資料5](#)

会計専門職大学院の設置認可申請について [資料6](#)

2005年度インターンシップの実施について [資料7](#)

関西大学情報教育セミナーの開催について [資料8](#)

心理学セミナーの開講について [資料9](#)

夏休み教員研修講座の開催について [資料10](#)

第6回サイエンスセミナーの開催について [資料11](#)

第3回博物館「なんでも相談会」の開催について [資料12](#)

4 大学側出席者

河田悌一学長、小幡斉副学長、広兼道幸学長補佐、藤田高夫文学部教授、大内辰郎工学部教授、山中敬一法務研究科長、井関正裕法務研究科特別任用教授、齋藤栄二外国語教育学研究科長、迫川勲作総合企画室長、藤本清高広報課長、他

5 参考資料

(1) 関西大学通信 第327号

(2) 社会連携推進本部リーフレット

(3) 第163回経済・政治研究所公開講座

(4) 先端科学技術推進機構ニュース Vol.31 1

(5) アジア文化交流研究センター 公開講座

(6) 大学案内/進学ガイド・セット(AO・SF・DD入試パンフ含む)

(7) 法科大学院パンフレット

以 上

【研究発表のテーマと概要】

東アジアにおける文化情報の発信と受容

文学部教授 藤田高夫

平成 17 年 4 月に開設された関西大学アジア文化交流研究センターは、中国文化に軸をおいてアジア諸地域の文化交流の諸相を掘り下げ、文化交流研究の新たなディシプリンを構築することが研究目的である。本センターは、平成 17 年度文部科学省学術フロンティア推進拠点に選定され、「東アジアにおける文化情報の発信と受容」をテーマとする 5 年間の国際的共同研究を推進する。

センターには、1. 言語文化研究班：「西学東漸」現象の言語文化的研究、2. 思想・儀礼研究班：東アジアにおける伝統儀礼・祭祀の研究、3. 交流環境研究班：文化交流を規定する歴史的環境の研究、の 3 研究班が置かれ、それぞれの視角から文化交流の様態や歴史的展開を探究する。さらに共同研究の目的として、総体としての東アジア文化の中に、中国文化と諸地域の文化を的確に位置づける視座を提示することをめざしている。

日本をはじめとする東アジアの諸文化の形成と発展にとって、中国文化の比重はきわめて大きい。同時に東アジアの諸文化には、中国文化に包摂されない自律性をもって展開してきた部分も多々ある。現在、この地域の相互交流は以前にもまして活発・緊密になっており、日本の現在と将来を論じる上でも、東アジアの文化交流を長いタイムスパンのもとで把握する研究は重要な示唆を与うるものである。

持続可能社会を先導する物質群の革新的開拓

工学部教授 大内辰郎

生体機能関連物質群、環境調和型物質群、および超先進物質群の開拓に的を絞り、21 世紀の持続可能社会を先導する物質群を革新的に開拓するための本プロジェクトを立ち上げた。

生体機能関連物質群の創製：ポリ乳酸グラフト化多糖やキチン・キトサンなどを繊維、フィルム化し、分解性生医学材料として、任意の速度で、生体内で分解消失し、様々な物性（硬さ、柔軟性、細胞接着性、組織非接着性、温度応答性）を有する生分解性高分子群を新たに創製し、再生医学用材料や癒着防止剤などの医用材料としての応用・実用化を目指して研究を展開する。

環境調和型物質群の創製：関大独自で開発した分子状酸素を酸化剤とする有機化合物の酸化反応の手法を更に応用展開することにより、環境調和型物質群創製法の確立を目指す。また、クリーンなエネルギー生産法として、太陽光エネルギーの化学エネルギーや電気エネルギーへの変換に関する研究を、狭バンドギャップポリマーという共役性の非常に優れた特殊なポリマーを用いて検討する。

超先進物質群の創製：ナノメートルサイズの規則的な空間を持つキラルな有機超分子多孔体を創製し、この微小なナノ空間に特定の分子を閉じ込めて化学反応や分子認識を行わせることにより、通常の液相反応では不可能な高度な選択性を達成する。また、シグナル分子を感知して構造変化する分子応答性ソフトマテリアルに関する研究成果に基づいて、環境・エネルギー・ライフサイエンスなどへ応用可能なソフトマテリアルや超分子の開発を目指す。

以上 3 つの研究を有機的に連結発展させることによって世界をリードするグリーンケミストリーの進展に寄与し、ひいては人類の未来の持続的発展に貢献したいと考えている。